

2001年

戦時体験記録集（第八集）

戦争体験を語り継ぐ会

◇目次◇

発刊のことば・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一	戦中戦後の生活報告（古井和男）・・・・・・	五二
播磨（石河孝益）・・・・・・・・・・・・・・・・	二	大人の国―たいじんの国―	
食べられるものは何でも食べた		（話陰地茂一・文章化 橋詰四郎）・・・・・・	五八
（川松俊夫）・・・・・・・・・・・・・・	七	戦中戦後の暮らしについて	
戦時の思い出（櫛野弘文）・・・・・・・・・・	十一	（山田俊治）・・・・・・・・・・・・・・	七二
戦後、彷徨の旅（田辺 博）・・・・・・・・	十七	今だから語れる私の終戦記	
私の戦争体験記（玉置留男）・・・・・・・・	三二	（渡辺甲子男）・・・・・・・・・・・・・・	七八
無題（中 村）・・・・・・・・・・・・・・	三八	兵隊と村人（梶野 渡）・・・・・・・・・・	八四
三人の大元帥に翻弄された私の青春		戦争体験の歌	
（橋詰四郎）・・・・・・・・・・・・・・	四十	《こめんなさいお母さん》・・・・・・・・・・	一〇六
軍人遺族の痛恨（伴 岩男）・・・・・・・・	四七	編集後記・・・・・・・・・・・・・・	一〇八



◇ 発 刊 の 辞 ◇

職場の後輩であったOさんから先日、定年退職の挨拶状が届いた。戦争を知っている最後の年代でしょう。

今年も半年後には六十年という大きな節目を携えて、太平洋戦争開戦の日が巡ってくる。

戦時には、今でも世界の各地域でみられるように子どもは弱者の立場に追い込まれる。その実感を強く持った六十代には七十代以上の先輩から戦争の実体験をしつかり聞いておく責任と、五十代以下の世代に語り継ぐ義務を担っている。

六十代の仲間入りをしたOさんに会って、戦時体験の有無、記憶の度合、これからのビジョン等々、語り合いたいと思っている。



播磨

石河 孝益

秋の取り入れも終えた十一月 中旬、婦人会員の母は、軍需工場

である東洋ベアリング桑名工場（現）へ慰問（慰め励ます）に行

くのである。昭和十九年、小学入学前のこと。古里の礎原駅か

ら桑名駅まで三重交通（現近鉄）に乗車。近鉄養老線に乗り換え

一区目が播磨駅である。

小さな駅舎を出ると民家は殆ど無く一面の麦畑が広がっていた。

東方へ一本道を十分も進むと、大工場の敷地に入る。

鋳物製の戦車の部品を造っていたようだ「ゴーゴー」「カンカン」

と耳を撞く轟音は五歳の私にも長時間は耐え難いものがあつた。

持参したのは、のり巻と稲荷寿司、おはぎを二段にして五箱はあつた。

婦人会のメンバー五名の手作り品である。

母たちは紺の文化服を装い、下はかすりや縞模様のモンペ姿で

ある。私も赤いセーターに、母と同じ縞のモンペをはいていた。

昼食時に届けて、帰りの畦道で一行は「おむすび」をほうばる。

大人たちが雑談している間に一足早く駅に着いた私。

『まりは』て書いてあるよ、ここから乗るの？

「ああ、孝益ちゃん、よく読めたね、えらいね……………」

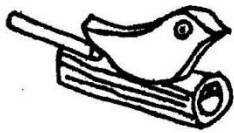
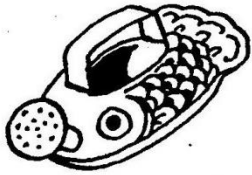
と隣のえい叔母ちゃんが誉めてくれた。

「まりは」は「はりま」の逆読みだったが、ほめられた事で良
くしたことを覚えていた。途中、桑名御坊（お寺）に参拝し、寺町
商店街で着せ替え人形を買って貰った。それが花嫁人形なの
だ。洋服でオカッパ頭ののなら、姉たちの手造りが既にある。ふり袖
の花嫁さんは、初めてで最高に嬉しかった。

セロハン包装の小袋を早く解きたくて、車中でも落ち着かなか
ったが、三十分も経って磯原駅に着く頃は眠ってしまったらしい。

三笠橋（員弁川）近くで、母の背から降りた。

人形は、軒下のむしろ（稲わらで編んだ敷物）の上で、雨の日
は玄関先の縁側で、友が居なくても一人でも、私の大切な相棒だ
った。



食べられるものは何でも食べた

川松 俊夫

私は、一九四二年（昭和十七年）十二月十八日に生まれた。戦争の記憶はないが、戦争の話を母から聞くと、今生きていることが不思議な気がする。

私は、何も知らずにスヤスヤと眠っていたそう。母が、私を抱えて流し台の下や防空壕（ぼうくうこう）へ爆弾から避難するための場所・主に地面に穴を掘ったに飛び込んだ。戦争中の苦しい生活を母や叔母さん（おば）からよく聞いたが、戦争が終わっても苦しい生活は続いた。

日本は戦後の食糧難（しょくりょうなん）時代へと入っていくが、戦争中を上回る厳しいものがあった。国のためという共通の目標を失った人々が、自分だけは最低の衣食住（いしょくじゅう）を手に入れ、とにかく生き伸びようと血眼（ちまなこ）になっている中で、焼けた跡の町には、栄養失調（えいようしつちよう）（栄養が充分にとれない状態）の浮浪者（ふろう者）（家も仕事もなくうろろしている人）や親のない子があふれていた。

まず第一に、食べ物がなかった。ご飯といえば、麦がたくさん入ってゴワゴワして食べにくかった。おかずは、一品ぐらいしかない。たとえば、魚一匹を頭、真ん中、尾のどれを取るかが重要なことだった。デザートなんかあるわけではない。みんな飢えていたので、食べられるものは何でも口に入れた。（よその畑で、サトウキビ、モモ、ヘビイチゴなど）好き嫌いなんか言っていられない。とにかく、早く食べないと食べられてしまうこともあった。このころは、自給（じきゅう）自足（じそく）（自分で食べるものを自分で作る）が多かった。

五十銭（せん）のこづかいをもらうと、駄菓子屋（だがしや）（お菓子を売る小さな店）へ水ようかん、練り飴（ねあめ）などの食べ物を買いに走った。すべての物が、足りなかった。

三、四歳の子どもでもお手伝いは、焚き木集めや薪割（まき）り、水くみ、部屋の掃除や雑巾がけをした。

文房具は、四月に買ってもらうと、一、二年間は大事に使った。自分の持ち物には、必ずはつきりと学年、組、名前を書いた。無くしたら、よほどのわけ

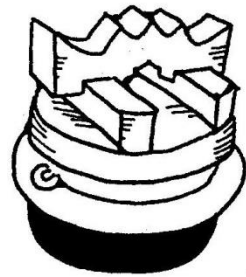
がない限り買ってもらえなかったからだ。使っていたクレヨンが折れたら、その折れたクレヨンを無くしたこともあった。それは泣くに泣けない思いであった。鉛筆も最後まで、指先で摘むほどの長さになっていても使っていた。教科書は、お金を出して買うので紙でカバーをした。でも、新しい教科書を手にした時は、たいへんうれしかったことを覚えている。ノートは、最後まできちんと使い、親に見せてから新しいノートを買うことができた。絵描きや計算などをするときには、新聞広告を切って何枚か束ねて使っていた。

当時、今日のような豊かな時代が来ることを、だれが予測しただろうか。

今の私たちの幸せは、戦争を通して得たもの。戦争の中で人々の願いを基盤として、それが戦争のとまどいの中で研かれて、新しい方向へすすくと伸びてきたものだと思いたい。しかし、若くして散っていったたくさんの命に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

今日も世界のどこかで戦争が行われていることを思うと、あの苦しかった子

ども時代を思い出してしまふのだ。



戦時の思い出

櫛野弘文

私は父の仕事の関係で、北九州で生まれました。旧制中学三年のときに太平洋戦争が始まり、学校では軍事教練（きょうれん）（敵兵を殺すための訓練）や兵器工場で工員さんと油まみれで勤労作業。食糧は配給で、母はタンスの中から着物を取りだしては、農家に行つて甘藷（かんしょ）（さつまいも）や南瓜（かぼちゃ）と交換していました。緒戦の大勝利でラジオからは、大本営発表や、ちようちん行列。毎日のように、駅頭に出征兵士を見送る日の丸の旗の波等、いまだに私の眼底にやきついています。

私は中学一年から剣道で鍛えられましたが、現在のようなスポーツとしての剣道ではなく日本古来の剣術でした。特に寒げいこの時など、朝五時起きで重い防具（剣道に使う道具）をかついで、約四キロの暗い道を歩き、昔の町道場（まちどうじやう）のような粗末な板張りに正座して、約三十分ほど先生の訓話があり、あけ放つ

た武者窓（むしやまど）（格子のみで戸の無い高い窓）からは、寒風と共に雪が舞い込むというありさまでした。

けいこが始まると、足はしびれてしまっているのに、上級生からは襟首（えりくび）をつかまれて、ひたたてられ、鍛えられていましたが、辛いと思ったのも約一年間でした。三年生のとき学校に警察から電話があつて、

「戦時中たるんでいる精神を、たたき直してやるから、警察署の道場に出てこい」

とのこと。ふだんはサーベル（西洋式の刀）をガチャガチャいわせて、威張りちらしている、ヒゲ面の警官たちも、ケイコを見てみると、たいしたことはないと思って、私達十人ほどで相談して、遠慮なく試合をやった結果、中学生の一方的な勝利で、その後は警察からは電話がありませんでした。

その頃、母は毎日のようにモンペをはいて、国防婦人会（国を守る為の女性ばかりの会）の防空演習（敵の飛行機が落とした焼夷弾により起きた火事

を消す練習」に参加し、中学生は農家の手伝い、兵器づくり、軍事教練等で学業の方は、年間で五分の一くらいでした。

剣道部の主将をしていた二年先輩が、海軍兵学校に入学し、夏休みには純白の制服に短剣を吊^つって、学校に来て、私共に檄^{げき}をとばして「国のために一日も早く兵隊になるように大声で皆をおおること」でしたが、私は強度の近視眼でしたので、肩身の狭い思いをしていました。（当時は強度の近視の者は兵隊にはなれなかった）

終戦の一年前に、私は中学卒業と同時に、大手の軍需化学会社（兵器を作る会社）から奨学資金をもらって、東京の専門学校に入学しましたが、日本も敗色が濃^こい（戦争に負けそうなこと）ということは、国民は無言のうちに感じとっている状況で、東京もいつ大空襲があるかと、夜間は灯火管制（窓をふさいで灯りを家の外へ出さないこと）でした。

一年足らずの学業半ばで、九州へ帰るようにとの通知で、北九州へ帰って間

もなく、東京大空襲とのことでした。戦後わかったことですが、東京の大空襲で、私のクラスメート十数人が死亡したとのことでした。

北九州に帰ってからは、私も学業どころではなく、子会社の研究所に勤めていました。軍需工場めがけた米軍の、連日のような空襲でしたが、工場地帯からは相当に離れていた我が家も、或^{ある}晩、焼夷^{しょうい}弾の直撃を受け、屋根を突き破った弾丸が、母の枕元から一米くらいの所に落下しました。幸いに不発弾で助かったことなどがありました。そのうちに米軍が沖縄に上陸、いよいよ本土決戦（日本の国の中で敵軍と戦うこと）が叫ばれるようになりました。

終戦の一ヶ月前になって、私宛に召集令状がきました。私は未成年でしたが、戦時特例ということでした。時間をみると、汽車の発車まで一時間しかありません。母が大慌てで、日章旗（日の丸の旗）に町内の寄せ書きをしてもらい、握り飯を持って汽車に飛び乗ったことを覚えています。車中で一晩眠り、翌朝眼をさますと、久留米^{くろめ}という駅の一つ手前で汽車は停まっていました。久留米

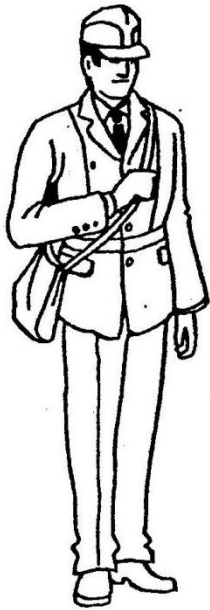
の駅は空襲で破壊されたということで、仕方なく線路に沿って次の駅まで炎天下を歩き、駅長さんに証明書を書いてもらい、汽車に乗り、熊本県の立野という駅で降り、その山中の陸軍特攻隊基地に入隊しました。

それからバラック（プレハブ）建ての兵舎で寝起きして、毎日の訓練がはじまりました。私達の隊は、直径十センチ、長さ一メートルほどの、すこぶる「たいそう」原始的なロケット砲の訓練でした。有効射程（弾丸が命中する距離）五十メートルくらいで、敵軍の上陸地点にタコつぼ（人ひとりが隠れるくらいの穴）を掘り、身をかくして上陸してくる敵の戦車を一発必中で仕留めなければ、こちらは玉砕（全員戦死）という特攻兵器でした。半月ほどで宮崎県の奥に移動しました。敵軍が宮崎海岸から上陸という想定のようにでした。約半月ほどたった朝、全員集合ということで、小さなラジオの前に整列しました。ラジオは雑音だらけでしたが、後に終戦の玉音放送（天皇陛下の放送）ということでした。それから三日後に、

「戦争は終わったので帰郷してよい」

とのこと、少しばかりの衣類や食料品をもらって、汽車に乗り帰宅しました。しばらくは虚脱状態（氣力も体力もなくなった状態）の毎日でした。小高い丘から八幡製鉄所（現新日鉄）の方を眺めると、一面の焼け野が原でした。

沖縄では女子挺身隊や子供達までが玉砕し、広島・長崎では原爆で多数の人が亡くなり、いまだに後遺症で苦しんでいる人達があるときいています。世界平和を祈念して。



戦後、彷徨の旅

田辺 博

宇宙の美しい星である私たちの地球が、大きな戦争の炎に包まれていた二十世紀が終わりました。世界中の人々は、今なおくすぶる各地の紛争に心痛め、平和を祈りながら新しい時代を生きようとしています。

五十六年前の昭和二十年（一九四五年）八月、中国大陆に始まった十五年に亘る長い戦乱の末、日本は惨めな敗戦国となりました。

三一〇万人といわれる尊い命が失われ、外国軍隊の占領下に、住む家を焼かれ着るものも食べるものもなく、暗黒の街をさまよい歩く人の群れ。物豊かな現在の生活からは想像もつきませんが、当時殆どの日本人が味わった辛い悲しい姿だったのです。

私は、敗戦の日を広島湾の小島（昔海軍の学校がありました）で迎えました。この地での思い出は、昨年第七集「江田島の寸描」に述べましたので、この

稿には、島を離れて東北宮城県の疎開先に辿り着いてから、戦後暫くの様子を綴らせて頂こうと思います。

日本の無条件降伏（何も条件を付けないで負ける）が、昭和天皇のラジオ放送で宣言されて一週後の二十二日、原爆で崩れ落ちた広島駅をあとにして、石炭を満載した東行きの無蓋貨車（屋根のない貨物列車）に乗りこみました。長い夏の日がとつぷり暮れて、うとうとと眠った頃、慌ただしい叫び声で目を覚ますと、近くに居た一団の少年兵の一人が見えません。走り続ける列車から線路に振り落とされてしまったのです。折角永らえた若い命を何ということでしょうか。戦い敗れて初めて出会う本当に哀れな出来事でした。

翌朝から、山盛りの石炭を両手で掻き落として体を埋め、汗と土ぼこりで真っ黒にまみれたまま三日目の夕方上野駅に到着しました。

地下道に溢れる長い行列に並んで、やっとデッキ（客車の出入り口）に乗りこんだものの、狭い通路と客席には高高と荷物が積まれて、人々は網棚を

含めた上半分の空間にうずくまっていた。

飲まず食わずの長旅に疲れ果てて、死人のような形相（顔つき）で目的地大船渡線気仙沼駅に着いた頃、辺りはすっかり暗闇に閉ざされていました。

「山越えの夜道はとても無理、明日早く出発を」

と駅員に諭され、荷物を体に結びつけてベンチで一夜を明かすことにしました。

次の朝、空の白むのを待って駅を発ち、唐桑半島に続く山道から海の見える峠に差しかけた時、転がるように走ってくる母の姿と、そのうしろを泣きながら追いつがる三歳の妹の顔が重なりました。

握りしめた二つの手に、夢ならぬ喜びを確かめた感激の対面は、奇しくも八月二十七日、私十七歳の誕生日でありました。

昭和二十年初秋、岩手県境に近い漁村の一室に肩寄せ合った母子三人は、必死に生きる道を求めて暗中摸索（あんちゅうもさく）（手がかりもなくいろいろやってみる）を繰

り返していました。

幸いに純朴（じゅんぱく）（素直で飾り気のない）な土地柄で、置いて頂いたKさんはじめご近所の方々も、身寄りの無い私たちを温かく力付けてくださったのですが、水田は海水が滲みこむため稲が育たず、肝心の米が全く手に入りません。

思い悩んだ末、母は米どころへの手づるを頼り、急ぎ転居を決心したようです。山坂三里を越えて一日がかりの役場通いの後、汽車の切符を買うのがまた大変、同県内でも早朝から窓口に並び当日は徹夜する難行（なんぎょう）でした。

引越しの日、鉄道チッキ（手荷物）二個のほかは、家財全部を肩に負い両手に提（さ）げて、山道に疲れて泣き出す妹の手を引いてもやれません。

秋深まる仙台平野の夜風は身を切るように冷たく、凍（こ）て付いた握りめしをかじり、人影も絶えた田舎駅（いなか）（石巻線前谷地）の片隅（かたぐ）に塊（かたまり）ってまんじりともせぬうち、東の空が白々と明けてゆきました。

疲れ果てた体を横にする暇もなく、第二の寄宿先Sさん方での厳しい暮ら

しが始まり、母と私は、次の朝から稲刈りの手伝いに広い田圃へ出ました。

生まれて初めての鋸鎌を手に、恐る恐る畦（あぜ）「田んぼの中の道」を往復するうち、アツと叫んだ一瞬、私の左小指は爪の根元までざっくりと割れて、引き裂かれた手拭はみるみる真っ赤に染まりました。その場では涙も見せず、私を叱りつけて休ませなかった気丈な（きじょう）一しっかりした一母でしたが、心の中いかにばかりであつたかと今も胸いたむ思いです。

この日を忘れぬようとの神の思し召しでしょうか、黒い傷跡はつい先年までくっきりと縦一筋に残っていました。

不運は続くもので、折角お世話頂いたSさんのお宅も已むない事情でお暇（いとま）することとなり、少し離れたHさん方の古い納屋をお借りして移り住みました。

十指を越えるこちらの大家族の皆さんは、本当に優しい方ばかりで、暗夜（あんや）に一条の光明（ひとすじ こうみょう）を見る有難い（ありがた）縁（えん）でした。縁が低く、積もった雪に埋まっている深い釣瓶式（つるべ）（井戸水を汲むバケツのついた）の井戸の怖（こわ）かったこと、戸の

代わりに吊り下げられた簾（むしろ）（藁などで編んだ敷物）が半分ちぎれた儘の畑の真ん中にあるトイレなど、馴れない環境に戸惑（とまど）い（まごつく）の多い毎日でしたが、母屋（おもや）から遥々（はるばる）と裸電球を引いてもらって、久しぶりに明るい夜が訪れました。

三度目の正直と言いますか、やっと人の耳を気にせず語り合える場所が与えられ、どんなに嬉（うれ）しかったことでしょう。

あの年敗戦の冬は、殊（こと）に寒さがきびしく暖かい湘南海岸（しやうなん）に育った私には、驚くほど沢山（たくさん）の雪が降り続けました。

Hさんのお口添えで、あちこちから野良仕事（のら）（田畑の農作業）の手伝いを頼まれて、雑穀（ざっこく）・野菜・干物・味噌（みそ）醤油（しょうゆ）などを頂きながら、何とかひもじい思いをせず日を送ることが出来ました。

同じ年頃の若者たちに誘われて、水田にドジョウを捕えたり山路（やまみち）にアケビを探したり、心安まるひとときも授（さず）かって、翌二十一年の正月は、部落の餅搗（もちう）

きにも仲間入りを許され、見知らぬ人々の情厚い励ましに涙する日もありました。

年が改まると、離ればなれで音信不通（便りがなく連絡が取れない）だった恩師や友人から健在の便りが届くようになり、雪解けを待つ間もどこかしく、ひたすら再会を夢見る少年の心を大きく揺さぶって行きました。

昭和二十一年二月、冬去りやらぬ寒風を突いてひとり東北を後にした私は、神奈川県平塚に小学校の恩師I先生をお訪ねしました。

「就職のこと、一度打ち合わせに来るよう」とのお手紙を、身元引き受けの採用通知と早合点して上京した教え子に、ご新婚間もない奥さまはどんなに呆れ驚かれたことでしょうか。

昔日の面影も無く焦土（焼け焦げた土地）と化した湘南の町、幸いお宅こそご無事だったものの、あらゆる生活物資が窮乏（ひどい貧乏）のどん底にあった中で、三度の食事から身に着けた物の手洗いまで、実の弟のように面

倒を見て頂きました。

勿体ないご恩は忘れる日とてなく、八年前先生ご逝去（亡くなる）の後も変わらぬお導きを仰ぎます。

砂浜で掘り起こした松の根つ子を燃料に、金五円で仕入れたドラム缶に立ちのぼる湯煙が今も懐かしく臉に浮かんできます。

陽春四月、新しい年度を待つて平塚を辞し、ご紹介を頂いた神田青果会館の弁護士事務所に就職しました。鞆持ちをしながら、夜間の法科に進みたいという私の希望でした。

ひとまず、ここの先生のお声がかかりで都内の某所に居候したものの、娘さんがおられる女世帯では長くも落ち着けません。

不運なことに、事務所は客足も疎らでさほどの仕事も無く、やっこの思いで勤め始めた職場も何か居辛くなり、再びもとの焼け跡に舞い戻ってしまいました。

心暗い晩春の日々、無情の花が散るように書生志願を断念した私は、恩師のお膝下も遠慮して、知人を頼り近隣の友人を尋ね歩きましたが、新しい職は一向に見付からず焦燥（しょうそう）（焦る気持ち）のうちに時が流れて行きました。

とある日、疎開先の母から

「大家さんのご親類の方が川崎のN電気に入られたが、下請工場のY電機にお前のことを頼んでくださった」

との便りが届きました。早速にお伴してお願した所、幸い入社を許され家族寮の一室を貸して頂けることとなって、冬の脱出行から四ヶ月、漸く自立への第一歩を踏み出す喜びが訪れました。

川崎と立川の両駅を結ぶ南武線向河原駅東隣り、六月二十一日だったと思います。

十七歳九ヶ月、その日から、生まれて初めて体験する世にも侘びしい自炊生活が始まりました。補助事務員の僅かな給料では闇市（やみいち）（内緒で取り扱う商品）

を売る市場の買物もままならず、青物は畑の落ち屑か多摩川土手の野草を摘んで、味つけは苦味の強いがりの岩塩が殆どでした。

市場に並ぶ肉類や魚などは高値で手が出ず、偶に配給される脂身ばかりの鯨肉（けいにく）（クジラの肉）が唯一のご馳走で、楽しみに待ったものです。

母の許から担いできた米は、非常用に一升（約一・八リットル）を残して、あと少しづつ雑炊にしました。当時は麩（小麦の皮くず）やモロコシ・ドングリの粉なども主食として配給され、正に貴重品だった白米の粒、夜遅く共同流し場が静まってから人目を忍びそつと研いだ覚えです。

宮城県へ貰い出しに帰る日は、朝へソクリの一升を全部炊いて、大きなおにぎり十数個を作り、東北本線から石巻線への乗換え駅小牛田では、上り列車を待つ人たちに残った分をみんな差し上げました。

「納屋の米俵が健在の間は、持ち帰らずに一人でも多くの方を喜ばせてあげよう」

教えられており、少年の日の小さな善行を積むことが出来ました。その中のおひとり東京瀧野川の上品な老婦人は、涙ながらにご住所のメモを手渡されました。お尋ねする折はありませんでしたが、頼を濡らされたあの時のお顔は、今もありありと私の胸に生きています。

町工場の下積み仕事は、酷しく辛い毎日でしたが、先輩方やお隣り同士のお助けで何とか大過なく夏が終わり、上司の温かいご理解を得て、家族との同居が認められることになりました。

晩秋の一日、母と妹はお世話になった遠田郡篁岳の疎開地に別れを告げ、親子は再び一つの部屋で手を取り合い喜びを共にしました。

時に母四十三歳、私十八歳、妹は間もなく五歳の誕生日を迎えようとしていました。

然しながら、喜びも束の間波瀾の船旅は続き、僅かな衣類を食糧と換える竹の子生活の果、貧しさのどん底にあった一家には、この日からまた新たな

棘の道が待ち受けていたのです。

雪の二月から辛酸（辛く苦しい）の四季を経て、やっと掴んだ小さな幸せでしたが、敗戦の痛手が癒えぬ社の経営不振から給料が遅れるようになり、母子はまたしても離散（離ればなれ）の運命を辿らなければなりません。

昭和二十五年春に到り、回復の望みなしと判断した母は、私には踏み留まって進学を志すよう命じ、自分は妹を連れて生地の名古屋に帰り、生きる術を探す覚悟を決めたのですが、六人姉妹のうち唯一人東に住んだ母に身内の風は冷たく、疎開のとき同様、誰にすぎることも出来ませんでした。

小さな妹を守っての馴れない労働の日々、寂寞（寂しい）とした川崎寮での自炊生活、再三の流転（移り変わる）を重ねながらも心一つに結ばれて懸命に生き抜いた私たちの姿を、今は懐かしく想い出しています。

思えば、敗戦の前年に父を失い涙も乾かぬ若い母でしたが、強風すさぶ僻地に闘いながら、よく自らを律して人の道を教え遺してくれました。献身の

愛あればこそ、今日の命授かるものと銘じ、空遠く亡き面影を偲ぶものであります。了

小稿に添えて

私は、昭和三年八月に生まれ、間もなく七十三歳になります。彷徨の旅路は、このあと名古屋から岐阜、更に東京へと続きますが、一先ず筆をおくことに致します。

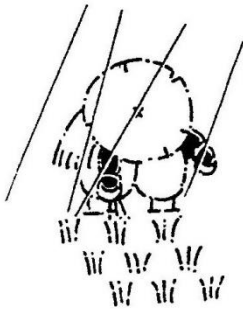
昭和二十年八月九日、ソ連（現ロシア）は非道にも息絶え絶えの日本に突然戦いを挑み、満州（現中国東北部）に攻めこんで来ました。

力尽きた日本軍は、徒らに敗走を続けるばかり、当時大陸に渡っていた一般日本人の内、二十万もの尊い命が失われました。

命がけで現地を脱出して内地に帰られた方々も、逃れる途中で、拉致、略奪、乱暴などのむごたらしい迫害を受け、そのご苦勞は、内地では考えも及ばぬ大変なものでした。

両親が亡くなったり、置き去りにされた幼な児たちは、中国残留孤児として悲しい運命が語り継がれています。

新しい二十一世紀を迎えて、世界はまた一段と大きな飛躍を遂げることでしよう。私たち日本人は歴史に刻まれた先人の歩みをしっかりと見つめて、感謝と反省を忘れず、平和の幸せを大切に守って行くことではありませんか。



私の戦争体験記

玉置 留男

昭和十九年に入り戦局は、初戦に奇襲に次ぐ奇襲で占領した地区も、次から次へと奪回（だっかい）（取り返される）され、今は、アリューシャンから小笠原諸島迄（まで）。脅（おびや）かされる戦況となつて来た。私は商売を営み乍ら（なが）、高辻にある航空機の部品製作の、中村製作所へ勤めていた。昭和十九年三月五日の事である。妻から電話が掛かつて海軍からの召集令状が来た旨（むね）の知らせが来た。私は一瞬「どきん」とした。電話の妻は泣いている。ついに来る時が来たかと思った。会社の連中は海軍工廠（こうしょう）の間違いではないかと云う。私もそうである事を願った。急いで家に帰ったら、何にもかも眞実（しんじつ）であつた。

時局（ときよく）（その時のありさま）が時局であり、半面予期していた事が、眞実（しんじつ）となつたのである。海軍が補充兵を召集するなぞ例がなく、今回が初めてで、第一期であつた。

留守家族は妻に五歳の長男と次男が三歳である。私は開戦当時から、日本の敗戦を疑わなかった。しかし日本人であれば、国に盡（つく）すのが、国民の義務であり、気持ちを切替えて、散髪に行き、熱田神官へ（ふうんちやうきやう）武運長久（きがん）（戦場で命を永らえること）と男子の本分（ほんぶん）（祖国を守る）が達せられる様祈願した。当時は出生地が本籍地となつて居り（お）、当然令状は、長野県へ来た。入団迄（まで）後十日しかない。海軍に関しては知識が誰も薄く、戸惑（とまど）うばかりであつた。海軍は四鎮守府（ちんじゆふ）（司令部）で編成され。横須賀、呉、佐世保、舞鶴で、私は横須賀である。商売関係の整備から、留守になつても、妻の困らぬ様に整備も終わり、十四日の出発に備えた。出発の朝、見送りの皆さん方が集まつて頂き、私は今だから云うのではなく、眞実（しんじつ）二度と帰る事のない事を覚悟した。

名古屋駅迄（まで）見送って頂き、プラットホームに五歳の長男も来ていた。愈々（いよいよ）出発のベルが鳴り、列車が動き出した時、五歳の息子が叫んだ。

「お父ちゃん！」

と。私は張り詰めていた緊張が一度に崩れ、涙がどっと留度なく、溢れ出た。

我が子を見るのは、これが最後だと思えて来た。夕刻鎌倉の宿舎に入り、朝を待った。翌朝海兵団から迎えが来て、営門に入る。その日は一日中身体検査で追いまくられた。私は心から合格を願う。不合格で即日帰郷など、不名誉な事はしたくなかった。夕方合格となり、ホッとした。不合格者が次ぎ次ぎ帰っていく、私はうらやましいとは思わなかった。二日位で一〇%位帰っていった。私は思った、亦召集されて合格したら我々の後輩になってしまうのだと。分隊の編成は一五〇名で、私は身長が「ビリ」から五人目であった。ここ迄来たら気力と能力だと思つて張り切った。準備も終わり雨の中を、久里浜の教育兵舎へ向かった。久里浜は各学校が多くあり、我々は通信学校に入った。当時は地方では無学の者が多く一五〇名の内一〇名位「イロハ」を知らない者が居り、別室で勉強をした。兎に角私自身が不思議な位張りきった。自然役員も

命ぜられた。その日その日を夢中で過ごした。と云うか追い廻されて過ごした三ヶ月であり、三ヶ月の教育も七月で終えた。「カラス」(階級が一番下の兵隊)と云われた我々も一等機関兵となり、家庭を犠牲にして得た様な「マーク(階級章)」である。ある程度成績に依り任地も定まり、私は班長の勧めで、ダイハツ艇(上陸用船艇)の講習生になり、海兵団へ一人で行ったのである。受講生は一〇〇名位で、一等兵から、上等下士官迄であった。

戦局はソロモン海戦で生死をかけた。最後の決戦であった。日本の戦力をこの戦いに全兵力で向い一気に挽回を計ったのだ。その戦いが電波探知機(リーダー)により、日本が大敗することを誰が予想したであろうか。イギリスが発明して、これで本土をドイツから守ったのである。日本もドイツも、電波探知機で敗けたのであった。講習も八月で終わり、運命を左右するとも云える任地への命令を待った。伍長室前に集合が掛かり、任命を待つ。第一声に

「お前達もいよいよ戦場へ向う時が来た。」

と云われた。私はこれで生きて帰れない事を確信した。第四補充部と云っただけである。兵課から新兵の「カラス」二〇〇名程と我々の方から下士官五名である。夕刻営門から横須賀駅へ向かった。私は男子の本望（ほんもつ）（持つてゐる望み）と感動したのであつた。軍用列車には軍属もかなり多く乗つてゐた。夜半名古屋駅に停車する。ホームに降りて駅員に家へのメモを頼んだが、後に「メモ」は届いていなかった事が分つた。門司に着いたのが翌日夕刻であり、陸軍をフィリピンに送る船団で兵員三千名位と云つてゐた。海軍はこの船団で高雄迄同行するのだ。この陸軍は、フィリピンに着く事なく、全滅したと聞いた。翌早朝船団は出港して、五島列島を南へ黄海に入つてゐた。昼食中に後方で大音響がした。急いで甲板に飛び出して後方を見た。その時はすでに後方の船は船首から海に突つ込んでゐた。始めてみる光景である。これが戦争かと思うと、同時に足が「ガタガタ」と震える。護衛艦（こゑいかん）の海防艦、駆逐艦（くちくかん）の姿は見えない。

「最近テレビで知つたのであるが、この辺りで二十年の四月、戦艦大和が沈

んで居る事がフランスの探査機に依りわかつた。」

この場を去り船は黄海を中国にそつて上海沖の島陰にかくれた。夜を待ち、台湾の高雄（たかお）に向かつて南下する。今は制海権も制空権も米軍にあつた。

漸く南下した処（ところ）で、最後方の船が真っ赤な炎を上げて全艦火の海である。

真っ黒な海面に燃える炎が各船に映る、早く脱出しなければ、全滅である。な

んとか朝方高雄へ入港出来た。港の中は先程の台湾沖戦で全滅した船が帆柱だけ出して沈んでおり、子供が登つて遊んでゐた。糧秣（食糧）を積み込み夕

方雨の中を南支那海に向かつて出港する。上官が最後の難関だから、頑張ろうと云つた。上官の云つた通り、夜半潜水艦が見くびつて浮上して来た。我が

方の船には十八ミリ機銃三機と爆雷（ばくらい）（対潜水艦用の爆弾）があるのみで、唯々

神に祈り乍（な）打ちまくる。甲板の真下に浮上した、潜水艦は不利と思ひ潜航（海中へもぐる）（こと）し始める。漸くして海面に油が浮いてゐる。誰が云うともなく

「勝った！勝った！爆雷で沈んだ！」
と。私は唯々^{ただただ}熱田神宮に頭を下げるのみであった。一〇〇米後方にいた船が、又魚雷の餌食^{えじき}となる。我々の船が海南島を経てベトナム沖を南下して、シ
ンガポールに着いた日は十九年十二月中頃であつた。よくぞ今日迄^{まで}生き永ら
えたと我が運に感謝する。



無題

中村

私がどうしても伝えたい事と申しますのは、女性だけが知っている事です。
本でも読んだこともなく話としても出来ないものです。

と申しますのは、生理用品のことです。脱脂綿も配給はありましたが、とても足りません。（個人差はありますが）

そこで私の考えましたのが、押入の客ふとん一枚をちぎり、上に新しいのをのせる方法でした。後日そのふとんは三分の一になっておりました。友人は洗って使用しておられました。

武勇伝はダメとのことですが、あたりまえです。これが人間のやった事かと思えるくらい残酷な事ばかりです。

新潟の拉致^{らち}事件の様なことをしてきた様です。人間は時がたつと、みんな自分に都合のいい様に、忘れてしまうのですね。自分有利形に。

樺太からふと（現在のサハリン）に一人のこされた北朝鮮の老人の、ドキュメントとかいろいろ見ましたが、涙なくしては見られないものばかりです。時代の違い、民族の違いとか…。

私の心に残る歌を一つ書きたく思います。

ほずつのひびき とおざかる

あとには虫も声たてず

ふきたつ風はなまぐさく

くれないそめし草のいろ

《婦人従軍歌の一節》



三人の大元帥だいげんすいに翻弄ほんろう（もてあそぶ）された私の青春

元第六国境守備隊歩兵 橋詰 四郎

◎一人目の大元帥だいげんすい

大元帥だいげんすい陛下へいかの命令で満州（現中国東北）第六国境守備隊は歩兵十個中隊、砲兵三個中隊。ソ連軍との戦闘で全員玉砕（戦争で死ぬこと）としても、三時間ししゅは死守（ししゅ）（死んでも守る）せよが大元帥だいげんすい陛下へいかの絶対命令であった。この三時間さんじかんで南満州の日本軍が戦闘準備をするという作戦である。

昭和二十年八月九日早朝、眼前の黒龍江（アムール河）を渡河（こくりにゅうこう）（川を渡る）しソ連軍が攻撃してきた。砲弾を沖繩へ送ったため弾丸のない砲兵隊は、対戦車爆雷（ばくらい）（爆弾）を抱いて、一人一戦車と次々と戦車に体当たりして戦死。三時間どころか八月十五日の敗戦も知らず、二十一日まで陣地へソ連軍を進入させず撃退（げきたい）し、攻防戦（攻めたり守ったりして闘う）を繰り返していた。

降伏（こうふく）は大元帥だいげんすい陛下へいかへの不忠義（主人に真心で尽くさない）と、何人かの兵

は降伏を拒否し離脱し私もその一人だった。大元帥が最初に降伏したのを知らずに。

畑に実る玉蜀黍を食べ、昼は隠れ、夜に南下する野良犬以下の有り様で逃げていたが、ソ連軍と戦わずに降伏した日本軍に遭遇し、はぐれ兵一軍隊から離れてしまった兵隊」として拾ってもらった。これだけ大勢なら殺されずに日本に帰れる。やつと大元帥陛下から解放されると確信していた。

◎二人目の大元帥

二人目の大元帥は名うて「有名な」の悪で、自分のためなら仲間は無論、肉親でも殺すと云う人物。日本兵をソ連の戦後復興に使うため、シベリアへ連行（無理に連れていく）し背後から銃口で狙わせ強制労働を強要した。シベリアで日本兵を待っていたのは、日本人の誰もが体験したことのない、酷寒・飢餓・重労働・虱（一人の血を吸う害虫）が伝染させる発疹チフスなどの疫病による大量死で、血便（血の混じった便）を垂れ流し、着替えもなく糞（便）

まみれで死んでいった。

死ぬと生まれたままの丸裸にさせ、通夜も告別（別れのあいさつ）もさせず小屋に積み上げ、トラック一台分になると何処かへ運ぶのである。生きている間は、虱と南京虫（一人の血を吸う害虫）に食われ、死ぬと狼に食われ、白樺（木の名前）の肥やしだ、エニセイ河に流されたら、蝶鮫（サメの名前）に食われキャビアに変身だ。

明日は俺が死ぬ番のシベリアは絶望そのもの。病人の薬もない、今は血が薬だ。献血すると三日間休ますと言う、血液型を調べる薬もないからO型だけと言う。栄養失調の戦友たちは止める、お前が死ぬぞと警告したが、三日休んで四日目に死ねば、血便を垂れ流さず綺麗な死に方が出来る。日本に帰れた人は、俺の死にざまを母に伝えてくれと頼む。皆明日は我身の沈痛（悲しみに沈んだ様子）な雰囲気を送り出される。二百CCと思っていたら、ソ連はヨーロッパ圏で倍の四百CC。倍であれば死の計算が更に確実になると思った。奴は

岡山市で生きている。戦争が悲惨（悲しく痛ましい）ならシベリアは地獄だった。

◎三人目の大元帥

地獄で白樺の肥やし、キャビアにもならず夢に見た祖国に生還（生きて帰る）すると、日本は三人目の大元帥が仕切る国になっていた。上陸するや机の上に着ていた物を全部脱がせ、スターリン同様生まれたままの姿にさせられ、五十メートルほど先の入浴場まで歩かされる。アウシュビッツでガス室に送られるユダヤ人を体験させられる。

入浴中に持ち物を全部調べさせ、極悪人スターリン大元帥もさせなかった屈辱的（くつじよく）一恥ずかしい思いをさせられる。な全裸の行列に抗議すると、マツカ―サー大元帥の命令だと言う。『これが祖国日本が俺等に対する上陸第一歩の仕打ちか、俺等が帰って来ては日本は迷惑で、いけなかったのか』とくやし涙で更に抗議する。

家に帰ると日本占領軍（アメリカ）の呼び出し。私と確認すると、向こうが私の特徴を読み上げる。

「君は橋詰四郎、頭髮は黒、目は茶色、顔に特徴なる黒子なし、右腕に刀傷あり、間違いはないか」

震え上がり戦慄（せんりつ）（怖れて震える）が背筋を走る。四キロメートル以上の行動は申告の厳命（げんめい）（厳しい命令）を受ける。

配達される郵便も、ハガキは勿論、封書も開封され。文面側一枚一枚に検閲（けんえん）（検査）済と濃い紫色のスタンプが、お前を監視しているぞとばかり押してあり判読（はんとく）（読んで意味を理解する）すらできない有り様だ。

この頃の日本は貧しく、停電は日常茶飯事（いはつも起こる）、街灯（町の灯り）もなく暗かった。夜遅く帰宅し家に入ろうとすると背後から、

「橋詰さんですか？」

と呼ぶ、振り向こうとすると、

「そのまま前を見ていなさい。」

と丁寧な口調で言う。

「何処へ行ってきましたか？」

と聞く。反抗的な態度をする中国人を日本は痛め尽くしていたので、逆らわずに素直な態度で応対する。世間話（いろいろな話）を二、三して気がつく
と姿を消している。俺はいつ解放され、自由な身になれるのか恐怖の毎日。シ
ベリアで消されたロシア人を見てきたが、『まさか日本で俺が』と影に怯える
生活。

昭和二十五年、何度目かの呼び出しで出頭する、半袖姿の記憶があるから夏
であつたと思う。毎回質問にだけ答えていたが、この時は座ると同時に私は叫
んでいた。

「私はカトリックだ。」

正面に座っていた彼は、素早く立ち上がると私を指差しながら

「ネームデー！」

と大声で叫ぶ。私も反射的に立ち上がり、不動の姿勢で

「十二月三日フランススコ・ザベリオ。」

と大声で即答する。

これを境に郵便物の検閲もなくなり、尾行もなくなる。後は四キロメートル以上の行動だけだ。テストとばかり無申告で登山や、魚釣り。私から影がきれいに消えていた。私は『解放』され『自由』の身になったのだ。

戦後五十六年、齒車が逆回りしていると危惧「心配し怖れる」しているのは、私だけではないと思う。



軍人遺族の痛恨

伴 岩勇

太平洋戦争で兄二人が海軍と陸軍で戦死した。

軍国（軍の関係）の家に生まれ、軍国の家族として周囲の人から一挙手一投足（いちどうそく）（行動すべて）に至るまで眺められたのである。

私は今でいうところの高校生で、当時は中学生であったが、忘れられないほどの戦時体験は脳裏（のうり）（頭の中）に残っていないが、陸軍で死んだ兄のことに觸れてみたい。

兄は高田歩兵第五十八聯隊第二大隊第八中隊長でビルマ（ミャンマー連邦）のコヒマ作戦に参加サンジャック丘の戦闘で二十三才の若さで春秋の志（こころざし）（若い命）を国に捧げたのである。

サンジャックの丘で第八中隊全員が玉碎（ぎよくさい）（全員が戦死）したのである。

コヒマ作戦に参加する前に兄は、泰緬鉄道（タイとミャンマー連邦の国境

をつなぐ）の建設中の鉄道隊に、配属され三千名の英濠（えいごう）（イギリスとオーストラリア）軍捕虜監視を一ヶ月余りやらされたのである。

鉄道建設作業は溪谷（けいこく）に鉄道の架橋（かきょう）（橋を架ける）を実施していたが、谷底の濁流渦巻く溪流（けいりゅう）を見ただけでも相当な難工事であった。

捕虜（はりよ）たちは鉄道隊の指導のもとにジャングルから木を伐り出すなどの労役（仕事）を主にやっていたようであった。

彼等（かれら）は英兵二千名、濠州兵千名で捕虜（はりよ）の通訳はシンガポールが陥落（かんらく）（攻め落とされる）した際に山下奉文司令官と「イエスカノーか」の問答をしたシンガポール防衛のイギリス軍のパーシバル司令官の通訳官ワイルド少佐（しょうさ）であった。

作業現場は有名な悪疫（あくえき）（悪い伝染病）流行の地帯で赤痢（せきり）やマラリヤ等の病人が続出したが、作業は強行命令なので休ませるわけにはゆかず、捕虜（はりよ）たちの中から死亡者や逃亡者があとをたたなかった。

余りにも逃亡者が続出したので、或る日兄は英軍 将校 五十名ばかりを呼び出して、ワイルド少佐（しやうさ）の通訳で責任を追及し彼等（かれら）に反省を求めようとした。

「君たちが責任をとって、自決（じけつ）（自殺）しなければ私が殺してやる」と言
って日本刀を振り上げて気合（きあい）をかけました。

しかしワイルド少佐は、頑（がん）として聞き入れず、かえって

「日本人は責任を取るために切腹（せつぷく）をするが英国人は絶対に自殺はしない。
これは民族の思想の相違（さうい）である。逃亡者の出ない環境にしてくれ。」

と喰（く）い下がり幾つかの条件を要求して兄を手こずらせた。

兄は陸軍士官学校卒（陸軍将校を養成する学校）で、中支（ちゅうし）（中華民國の中央地帯）でも勇名（ゆうめい）を馳（は）せた 将校（しょうこう）だった。

物解（ものわか）りもよく、それ以来は出来る限りの誠意を示して捕虜（ほりょ）たちの信頼を得、
逃亡者も出なくなった。

その兄は、コヒマ作戦中、サンジャックの戦闘（せんとう）で壮烈な戦死を遂げた。

太平洋戦争の犠牲者（ぎせい）は二百五十万名いや三百万名と言われている。

「海行かば水漬（みづ）くかばね、山行かば草むすかばね……」

で多くの英霊（えいれい）（戦死した兵士）は無念の涙をのんで死んでいったのである。

インパール作戦は太平洋戦争末期で戦い利あらずの下り坂で何のためのイン
パール作戦だったのか。

戦勢挽回（せんせい）の望みは当初からなかったのである。

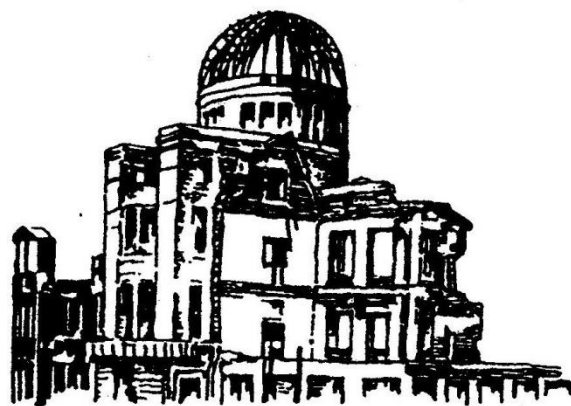
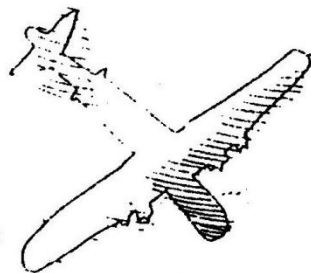
当時のビルマ（ミャンマー連邦）からの兄の手紙、遺書、遺骨の一片すら何
も遺族のもとに届けられなかったのである。

今日の日本の繁栄と成長は多くの英霊（えいれい）の賜物（たまもの）「おかげ」であることを思い、
人類の悲劇をもたらす戦争は二度としないことを誓（ちか）うのが英霊（えいれい）に捧げる最大の
供養である。

民族に文化があることは、古今を問わず先人が成し遂げた足跡は活字となり
或いは映像となって次の世代へ語り続けられるものである。

(注)

インパールはインド北東部に位置し、当時のビルマ防衛（ミャンマー連邦）を主目的として昭和十九年三月に作戦が発動されたが、ぼうだい 膨大な犠牲（参加兵力十万人のうち戦死者三万、戦傷者二万、さんぞん 残存兵力五万のうち半分以上が病人であった）を払って作戦は失敗に終り、四ヶ月後に中止された。



戦中戦後の生活報告

古井和男

私は昭和二十年、敗戦の年に、愛知商業学校へ入学しました。現在地は、瑞陵高校と名称を変えた所です。

丁度八月十五日の事、夏の暑い日でした。学校のほうあんてん 奉安殿（天皇の写真安置所）の地下より、旧式小銃をはこび出し、配属将校（当時全国の中学校へ派遣されていた軍人）の指揮のもと、私達一年生は、小銃をかついで、千種造兵廠（しょう 現在の東市民病院附近にあつた陸軍の兵器工場）まで行進させられました。

当時二年生以上は、学徒動員令で全員が工場勤めでした。

一人当たり一丁ないし二丁の小銃をかついでその重い事、汗を出しながら隊列をはなれないようにして、今池付近で休憩となりました。お昼過ぎでしたが、天皇のラジオ放送があつて、人々がざわめいていたのが憶い出されます。

それは〈敗戦Ⅱ終戦〉の発表でしたが、よく状況のわからないまま行進を再開し、千種造兵廠^{しょう}へたどり着いた時は、大混乱の最中でした。今、その時どう処理したのか憶い出せません。

当時の配属将校からは、軍事教練（敵兵を殺す為の訓練）と称する授業があり、「貴様等は将来の日本を背負う将校に成るのだから……」と云う理由で、十二歳の私には、びっくりする教育でした。

勿論、八月十五日以降は、すべての教育が逆転し、教科書は一部をスミ消し、軍事教練は無くなり新しく社会科が加えられた憶えです。

当時、国鉄枇杷島駅^{びわしま}に近い所に住んでいましたので、枇杷島駅から名駅迄は国鉄を利用し、名駅から市電を利用しました。

戦時中のこと、市電の車掌に、淑徳女学校の生徒が動員されていた事を思い出します。

しかし、代用車掌の可哀想な事、いくら上級生とは云え、十五、十六歳位の

中供^{ちゅうども}です。背丈は低く、子どもに毛が生えた程度、その人に大人なみの仕事をさせるのですから大変です。

当時の市電は、現在のパンタグラフ式ではなく、先端に回転する集電子^{しゅうでんし}（電氣を通す為の道具）のついた、鉄製のポール（棒）から電氣をとっており、それが雨天の時や、交差点などで、よく滑ってはずれました。車掌はポールに付けられたロープを操作して、集電子を上空に張られた架線^{かせん}にはめるのですが、その作業はむつかしく、それこそ半泣きで、ベソをかきながら作業をしていました。乗客の大人達は知らん顔、だれも手伝わず文句ばかり、冷たいものでした。

又、敗戦近い頃でしたが、通学の途中の帰途、名駅附近で空襲警報の発令を知り、逃げようと思った時既に遅く、頭上に米国の戦闘機が数機飛んでおりました。低空飛行状態になっては、機銃掃射（戦闘機から機関銃で撃つ事）を繰り返しており、近くの防空壕^{こうごう}へ逃げ込む努力をしましたが、すべて満員お

ことわり、致し方なく、頭上を見上げては、焼け残ったビルの周囲を逃げ廻りました。機銃の発射音と共に、近くのコクリート面が、斜めに削り取られるのがよく判り、ぞっとした憶い出があります。当時、制空権（味方の飛行機で空の安全を保つこと）を失った日本は、近海迄、米国の空母に制圧され、そこから発進した戦闘機が、名古屋市内まできたものと思いました。

戦後の事になりますが、食糧難はひどいものでした。配給米だけでは到底生きてゆけず、ヤミ米や代用食で、なんとかごまかしたものです。日本全体が空腹におびえた生活でした。私自身、弁当箱の中味がサツマイモ二〜三本と云う事もあり、昼食抜き級の級友のいる事を思うと、がまんしなければと思いました。

又、通学途中の事です、たまたま何かの事情で、名駅ホームの待合室で弁当を開けてサツマイモを食べた時、隣に坐っていた見知らぬおばさんが「学生さん、一つ私に分けて下さらんか！」と云われ、びっくりしました。しかし、私自身の空腹に負け、おことわりしてしまいました。

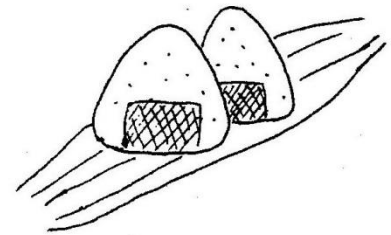
今振り返れば、やはり、せめて半分でも差し上げるべきだったと反省しています。

又、家の近くにハス田（蓮根のたんぼ）があり、夜になると「ガア、ガア」とうるさい位鳴く蛙かえるに困りましたが、食用蛙かえると云う事になると話は別です。

泥まみれになりながらつかまえた蛙かえるのおいしい事、今の鶏肉に似た、あっさり味でした。若い世代の方と話した折、蛙を食べた話をしたら「本当？」と云う顔をされましたが、事実です。

戦中、戦後の苦しかった生活、花より団子で、食料を求めて走り廻った生活は、今の人達には予想もつきません。

将来、天候異変でも起きた時、食糧難の再現を心配しますが、天下泰平の時代、どなたも相手にしてくれませんか。ありがたい時代になったものです。



初孫^{まご}を膝^{ひざ}に抱いたら、やわらかい体と体温が陰地茂一に伝わってきました。その軟らかさを十指（手全体）に感じた彼は『ああこれが平和なのだ。』と実感した時、涙があふれ出て、『この可愛い孫^{まご}に二度と戦争をさせてはいけない』と思い、自分の過去を語り始めました。

陰地は、旧満州（中国東北）で敗戦、シベリアに抑留^{よくりゅう}（無理に引き留められる）されるが、一九五〇年BC級戦犯として中共軍に渡されるため旧満州に逆送され、更に六年間戦犯としての拘留^{こうりゅう}（留置所に入る）体験を経験してきました。一九九七年 夏の終わりの日に

大人の国 —たいじんの国—

話した人 陰地茂一^{いんちしげかず}

文字にした人 橋詰四郎

ガチャンと重い余韻^{よいん}のある金属音を残して監房^{かんぼう}（四人を入れる部屋）の鍵

を掛けられた瞬間、文字通り目の前が真っ暗になり、絶望と自暴的（じぼう）「やけになること」な思いが湧いてきました。しかしその翌日からの日常が始まってみると、驚くべきことが待っていたのです。

シベリアの酷寒・飢餓（うが）「食べ物がなくて飢える」・重労働・疫病（悪性の伝染病）とは違う、信じ難い世界がそこにあったのです。新中国が誕生して僅（わず）か九ヶ月、食料事情の決してよくない時期で、この兵士（すなわ）即ち、撫順（中国の地名）戦犯（戦争犯罪人）管理所の人々は粟・コウリヤン（中国人の主食でトウモロコシに似た穀物）を主食にしていた時、私達日本人戦犯には温かい白米飯、肉、魚、野菜等食べ放題。贅沢（ぜいたく）にも監房（かんぼう）にはスチーム暖房が入り、しかも強制労働は一切なし。しかし最初の一年は反抗の連続で

「戦犯とは何事だ。殺すなら殺せ、帰すなら帰せ」

と迫（せま）る連続でした。

戦争が終わったのにソ連の戦後復興のためシベリア。地獄の強制労働を五年

間も生き抜いた昭和二十五年七月、日本へ帰る日本人から私は元憲兵（けんべい）（軍隊の中の警官）と密告され、BC級戦犯として、シベリアから中国へ移管され、絶望と不安で自暴自棄（じぼうじき）（望みをなくしやけになる）になっていました。

私は昭和十七年（1942）一月現役入隊。三ヶ月の訓練を受け旧満州に派遣。憲兵（けんべい）を志願し十ヶ月の憲兵教育の後、富錦憲兵分隊に配属されました。

富錦市はソ連国境に近く、人口六万五千人数の一見閑静な町でしたが、一步憲兵隊（けんべい）の門を入ると、そこは戦場であり、地獄でした。鞭（むち）のうなる音、怒号（どごう）（怒って叫ぶ声）、悲痛（ひとく）（悲しい）な叫びと唸（うな）り声。平和な町とは裏腹（正反対）の世界が繰り広げられていました。留置場には常に四五人。多い時は十二三人入れられて、代わる代わるに呼び出しては拷問（ごうもん）（苦しめて白状させる）を行なうのです。

殴（なぐ）る蹴（け）るは優しい方で、後ろ手に縛（しば）り上から吊（つる）し、竹刀（しな）がボロボロになるまで殴（なぐ）る、その他、言葉にはとてもできない様な残虐（ざんぎやく）な行為に発狂する人も

ありました。

何故このような非人間的な行為が平気で出来たか？それは教育でした。
神州日本の大和民族は他民族より秀れ、アジアの盟主（同盟した人々の大将）である、他民族を蔑視（べつし）（バカにした目で見る）差別する思想教育と侵略した国に神社を建て拝ませ、宮城（みやぎ）遙拝（きやうはい）（皇居をはるかに拝む）と日本語教育を強制し、他民族も天皇の臣下（しんか）（けらい）にする『皇民化政策』を教育でマインドコントロール（心を操られる）をさせられていたのです。

拷問は天皇陛下の御心（みこころ）を守り判らせるため、何の罪悪感もありませんでした。一九三二年関東軍への勅語（ちよくこ）（天皇の言葉）にも『東洋平和ノタメ毒草ニモヒトシイ中国人ヲ』とあります。満州に五族協和（きやうわ）（五つの民族へ当時の解釈で日本民族・朝鮮民族・漢族・満州族・蒙古族）が互いに力を合わせて仲良くすることだが、当時は日本がリーダーと教えられていた、王道楽土（おうだらくど）（正しい道と徳で天下を治め、楽しく暮らせる土地）を建設するのが大御心（おおみこころ）（天

皇の気持ち）であり、この陛下のご命令に反抗し抵抗する者を匪賊（ひぞく）・馬賊（ばぞく）（盗みの集団）と呼び反逆者にして捕らえ、怖れ多くも大御心を痛める不逞（ふてい）の輩（やから）（天皇の命令に従わない人）と教えられ信じていたからです。全く疑念も抱かず天皇陛下のためになるならと、罪悪感などあるはずがありません。オウム信者のように当時の日本人は『皇国民教育』にマインドコントロールされていたのです。

拷問を加え失神（こうしん）（気を失う）し、死ぬと裏を流れる松花江（しょうかこう）（中国東北地区のアムール川の支流）に投げ捨てました。拷問に耐え抜き生き延びても、足腰が立たず送検も釈放も出来ず、教育材料にするために陸軍病院に引き渡しました。引き渡しには証拠隠滅（いんめつ）のため関係書類を焼却してから渡すのです。教育材料即ち、生体解剖し陸軍病院の外側の墓地に、家族にも秘密にして埋めます。

中国愛国者レジスタンスの組織はすごく正確で、埋めると夜明け前に亡骸（なきがら）

は家族か仲間掘り出されているのです。するとまた憲兵である私達が、これと思う人物を逮捕し拷問で取り調べるのです。陸軍病院へ渡した若い屈強な韓国人は麻酔を何本打つても効き目が薄く大きな目を益々開き

「アイゴーアイゴー」

と叫び続け軍医中尉が

「かまわぬ、やれ」

の一言で、衛生兵が腹からメスを入れ解剖しました。

昭和十九年（1944）真冬の日、私は同僚の憲兵と『マルタ』としか呼ばない中国人二人をハルピンの731部隊に汽車を乗り継いで連行しました。

車内で用便を申し出たので手錠のまま連れて行き、開き戸式の車内トイレに入る時、命令された通り片足がトイレのレール上に来た時、力強くドアを閉めます。当然片足は挟まれ傷付き腫れ上がり、これで逃げることは出来ません。

腫れた足に靴は履けず脱がせましたが汽車から降りると、外気は氷点下二十度

の石畳に素足ではたまりません。飛び上がるように傷付いた足をばたつかせます。同僚の憲兵は

「どうせ殺すんだ、かまいやせん」

もう一人の中国人が着ていたシャツを素早く脱ぎ、二つに引き裂き相手の足を包んでいました。

その時二人が私を睨みつけた物凄（ものすご）い形相（顔つき）は、今でも私の目にはつきりと焼き付いています。このように731部隊に連行された三千人の『マルタ』は化学的殺人兵器の実験材料にされ、一人の生還者（せいがん）もありませんでした。

やがて敗戦、シベリアで地獄の抑留生活を五年耐えて、やっと日本に帰れる時

「陰地は憲兵だ！帝国主義者だ！日本へ帰すな！」

と罵声（ののしる）を浴びせられ、残されました。私を残らせて日本へ帰

った人も、共産主義に洗脳され罪悪感はなかったと思います。

そして、前述した中国への身柄移管となったのです。被害者側の中国の人々にとつては八つ裂きにしても飽き足らない私達日本人に対し、どんなに反抗しても悪態をついても怒った顔一つ見せず、いつもにこにこ対応してくれるのです。病気になるれば診察し治療と養生をさせ、歯が悪い者には入れ歯を、目の悪い者には眼鏡を、シベリアで怪我や凍傷で足や手を無くした者には義足、義手を作ってくれました。とても常識では考えられないことばかりです。このように人間には誰でも『良心』がある事を事実をもって教えてくれたのだと思います。

ここへ来て、私達を監視し世話をする中共軍兵士より美味しいものを腹一杯食べ労働もなく学習をして三年がたち、四年目に入った頃、私の罪業（犯した罪）の取り調べが始まりました。拷問で取り調べた私が今度は取り調べを受けるのです。

いざ始まると私の取り調べ経験と常識では考えられないことばかりです。

威嚇（いかく）（おどす）も強制も拷問（こうもん）も全くない

「自発的に自分の罪を認め、正直に書きなさい。そうすることによってのみ、明るい君の前途を開くことが出来るでしょう」

と、言うのです。この報復のない驚嘆（きょうたん）（驚く）すべき人道主義、温情主義はかつて皇国民教育（こうこくみん）を徹底教育された「精悍（せいかん）」（鋭くて荒々しい）な私の心を徐々にほぐし始めていました。

しかしいざ自分の事となると『いよいよ来るべきものが来た、これは毘（ひ）では』と疑い、寝付かれない日々が何日も続きました。パン工場が建設されれば死体焼場に見え、食欲もなくなり、昼夜の区別もはっきりしなくなっていました。完全なノイローゼです。生き羞（はじ）を晒（さら）してよいか、自殺した方がよいか迷いの『毘（ひ）』に脅（おび）える毎日でした。これは私だけでなく、ここにいるBC級戦犯全員同様でした。そして『毘（ひ）』に脅（おび）え二人の自殺者が出ました。一人はク

レゾール液を飲み、一人は便所に飛び込んで。

便所は穴を大きく掘り板が渡してあるだけのプールのようです。夏は排便を溜め、冬凍ったのを掘り出し元の大きさに戻すのです。自殺は夏でした。この時、信じられないことが起こりました。監視の中共軍兵士が私のタオルをもぎとったと思うと、そのタオルで自分の目鼻をくくり、プールのように大きいドロドロの糞池ふんち（大小便がたまつて池のようになったところ）に飛び込んだのです。

ドロドロの糞尿ふんにょうの中を探し廻り、探し当て引き揚げた兵士も汚物だらけです。その兵士は素早く日本兵の口の中の糞ふんを手で掻き出したかと思うと、口づけて人工呼吸を始めたのです。十数名の日本兵は呆氣あおけに取られてただの傍観者ぼうかんで私もそうでした。医者が来る、看護婦が来て注射をする、傍観者ぼうかんの日本兵に『お前達の仲間だ兄弟だぞ、見ていないで手伝え』とも言わず、糞ふんまみれになり懸命に蘇生そせい（生き返らせる）の努力を。私達日本兵は『明日は

我身わがみ』の感覚しませんでした。

テキパキと手段を尽くしたが生き返ることが出来ませんでした。医者が小さな声で

「メーファーズ」（運命に逆らえないような深いあきらめの思い）

と言った時、飛び込んだ兵士が亡骸なきがらに取りすがり

「誰がお前を殺すと言った、どうして俺たちの心を理解してくれないのだ」

と号泣ごうき（大声で泣き叫ぶ）したのでした。

この衝撃しょうげきは私の自己防衛、私自身の『過去をどのようにして隠すか』のノイローゼを吹き飛ばしただけでなく、もうこれ以上嘘うそは付けられない気持ちにさせました。皇国民教育こうこくみんにより、すっかり失われていた私の『良心』を呼び起こし、呼び戻してくれたのです。そして洗いざらい罪業を告白しました。そうすると不思議に気持ち楽になり、落ち着きを取り戻す事が出来たのです。後で知った事です、時の首相、周恩来しゅうおんらいが

「今ここで彼らに恨みを晴らしたら、日本の家族はまた中国を恨むだろう。我々は平和のために我慢しなければならぬ」と、言われたと聞きました。

昭和三十一年（1956）七月、中国最高人民検察院は日本人戦犯に対し「不起訴」という驚くべき寛大な措置を言い渡したのです。多くの被告たちは泣きました。命が助かったからではなく、寛大な措置への感謝と、自分の犯した罪への悔悟（過ちを後悔して改める）の涙でした。

戦犯管理所は帰国前夜盛大な送別の宴を催してくれました。その席で所長は挨拶の最後を

「苦しい事もあった、しかし君達は自分の力で乗り越えたのだ。そこで始めて被害者『中国』の立場に立つことが出来た、我々はそのためにお手伝いをしただけのことである。日本に帰ったら、家族団欒の生活を送って下さい。間違っても二度と侵略戦争には加わる事のないように」

と、結びました。

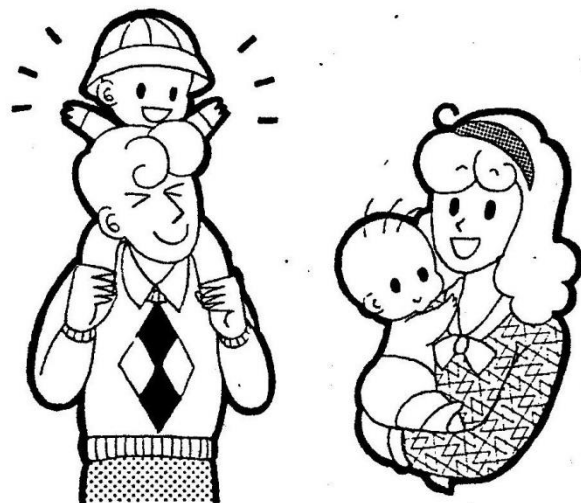
私は何か恩返しをと思いつつ、大きな罪悪の数々を中国大陆に残したまま、十五年目の帰国でした。『命令だから仕方がなかった。』この思いは最後まで残りました。私を最後にして『あの時は戦争だった、命令されたから』言い分けする人を一人も出してもらいたくないのです。

戦争は一握りの偉い人が決め、責任は国民全部で背負うのです。かけがえない命と家族、財産を失うのは命令を受けた国民です。命令を受けた私の責任は決して歴史の中から拭い去ることは出来ない事実であつたのです。

私が罪状を許され日本に帰れたのは『運』ではなく、中国人の大きな心でした。四十歳近くになって独り日本に帰り、幾多の辛酸（辛く苦しいこと）を経験しましたが『自由』『平和』があり、今の私があるのです。

私が殺した命は断絶され、いま私は家族に囲まれ孫を抱いています。私の命が受け継がれているのです。「いのち」が安心して受け継がれていく世界に

したいです。



戦中戦後の暮らしについて

山田 俊治

私は昭和七年に田舎町^{あすけ}足助で兄弟十人の九番目に生まれた。当時、町会議員だった父は生めよ増やせよの時勢にあり、率先^{そつせんすいはん}垂範（先頭になって手本を示すこと）したとか。野山を駆け回り兄弟喧嘩をしながら育った。

昭和十四年小学校へ入学、三年生の昭和十六年に太平洋戦争が勃発^{はつぱつ}（起こる）、その年、小学校は国民学校に改められた。わが家も兄弟は多く兄貴達（さんざん）着古した洋服を母が破れをそくつて（直す）、それを着せられ自分のために新調してもらった記憶がない。

また履物^{はきもの}は毎日、母の手作りのわら草履^{ぞうり}か、雨の日は下駄^{げた}。靴は学校からの配給で順番がこないと手に入らない貴重品であった。

学校の教科書は先輩の使ったものを大切に使った。次第に戦争は激しさを増し、物資は戦争優先となり三度の食事も代用食（サツマイモやカボチャなど）

が多くなった。戦後しばらくは、戦争中の教科書の戦争に関する箇所を墨で塗りつぶして使った。また昭和二十二年頃から使い始めた教科書は、新聞紙そのものに印刷したものを、ハサミで教科書の大きさに切つて、糸でとして使った。

高学年になると学校の授業は少なくなり、出征（しやうせい）（戦争に行く）兵士宅の農作業支援のため鋤（くわ）や鎌（かま）と弁当だけを持って登校し、農家に配属され時には夕方おそくまで勤労奉仕をさせられ、途中疲れて泣き出す友達もいた。

また学校の運動場はさつまいもや大根の畑と化し、その栽培作業を強いられた。

わが家も兄三人が何れも陸軍の軍人として出征（しやうせい）したが、一番上の兄は戦死し帰らぬ人となった。

一方、毎日の三度の食事粗末なもので、とても満足出来るものではなく、いもや水団（すいとん）で済（すま）す家も多かった。今思えば同級生は皆小柄で、当時の食事が如何（いか）に貧しいものであったかを物語っている。特に伸び盛りの大切な時期の栄

養不良によるものであろう。

農家で育った私達は、幸い死ぬ程の思いはなかったものの、当時名古屋から疎開（そかい）していた友達も沢山（たくさん）いたが、食事には格別の苦勞があり、毎日が食糧戦争であった。

戦争末期の昭和十九年は六年生で、毎年学校行事として修学旅行が行われていたが、われわれのクラスは戦争の余りの激しさから中止となり、悲しい思いをした。そこで八年前六十歳の還暦（かんれき）を記念に、その出来なかった修学旅行を企画し、伊勢神宮を参拝し、一夜を共にして幼時の辛い思い出を語り明かした。

昭和二十年八月ついに力尽きて敗戦。物心ともに荒れ果てた状態の中、ただ茫然（ぼうぜん）として時は流れ、生きんが為（ため）の食糧の確保、生活環境の回復整備（あわ）と慌ただしい毎日の連続が、昭和二十年代前半のすべてであったと思う。

この戦中の体験は兵役（へいえき）をおさめられた方々は勿論（もちろん）のこと、われわれの人生の原点でもあり、心の奥に留（とど）まっている、物は粗末（そまつ）にしない、いたわりの心

は大切にしたいものである。

太平洋戦争が終結して二十一年と二十二年続いて、県下の各所で深刻な干魃^{かんばつ}（日照り）が起こり、米を始め野菜、果物などの不作に加え、海外からの引揚^{ひきあげ}者（戦争中に他の国で生活していて、戦後に日本へ帰ってきた人達）などによる人口増もあつて、食糧危機に陥^{おちい}り大騒動となつた。そこで国民の命のもとの食糧の確保、大自然に晒^{さら}され、その年の天候に大きく左右される食糧生産のむつかしさ、その対策の大切さを痛感したものである。

占領国アメリカの指導の基^{もと}に、わが国の諸制度は昭和二十一年日本国憲法の公布に始まり、戦時体制から一転、平和の時代へと政策転換が行われ、私も昭和三十三年には新制度に則^{のっと}り農業改良普及員（効率の良い農業の方法を教える人）となつた。

悲惨^{ひさん}とも言える飢餓^{きが}状態にあつたわが国にとって、最優先されたのが食糧増産であり、また最初にとられた政策が農地改革であつた。それまで多くの農家

は土地を地主から借りて小作^{こさく}であつた。とれた米の半分以上は地主に納めなければならなかつたが、この農地改革によつて自分の土地を得ることができ、増産意欲は高まり収穫は終戦後三年にして、戦前の水準にまで回復した。

しかしまだ毎年100〜200万トンの米が不足の状態であつた。

昭和二十年代後半には農業も順調に回復し、農産物の収量も増え、農家の経済も多少のゆとりが現れ、暮らしも次第によくなつてきた。

昭和三十五年頃からは、わが国の工業が急ピッチで発展し始め、いわゆる高度成長の始まりである、機械化、省力化が進んだ農業の発展は、工業発展に不可欠な労働力を提供することとなり、世界から奇跡とまで言われた。

戦後のわが国の経済復興は、重化学工業が中心になって達成されたとも言える。その背景には農業の生産性の向上と、そこからの豊富な労働力の供給があつたからである。

高度経済成長期に入ると食生活も少しずつ変化し、それまで食事の主流だつ

た米、いも、豆、野菜、魚介類のほか、畜産物、小麦粉製品、油脂類、砂糖類が加わり、いわゆる食の洋風化が見られるようになった。

昭和四十年代に入るとインスタント食品、冷凍食品など加工食品も出回り、洋食、中華料理などが家庭にいながらにして、世界の料理が味わえる。昭和二十年代には全く想像もできなかった豊かな食生活が実現した。実に夢のようにも思える。



今だから語れる私の終戦記

渡辺 甲子男

私は徴用^{ちようよう}（国の命令で戦争に関係のある工場^{こうしょう}で働くこと）された豊川海軍工廠（武器や弾薬を作る工場）で約三年間と軍隊の中部二八部隊で約半年間、生きるために命がけで働いた。「欲しがりません勝つまでは」と誓わせられたドン底の生活で、どんなに苦しく辛くとも飽くまでも頑張り抜く、不屈（負けずに頑張ること）の精神だけは養われたと思っている。

老いも若きも国のために心を一つにして生き抜こうとした時代であった。考えようによつては、終戦前後の不自由で食うや食わずの頃が、現在振り返えって見ると、最も公平に近い世の中だったのかも知れない。

苦勞することを忘れがちになっているのが、この頃の日本である。その結果が「平成の大不況」であろう。平和で豊かに成り過ぎている現在の日本は、戦争の焦土の上に築かれていることを忘れてはいけない。

私どもの年齢の者は、小学生から「君に忠・親に孝」「君は天皇陛下」の教育勅語のもとにすべて一丸（いちがん）「心を一つにする」となって、国を護るという気持ちの上に行動していた。また、軍需工場（戦争に使う兵器を作る工場）や軍隊での勤務では即戦力につながっているものだと思われ、何時（いつ）も戦局の一端を担っている（一緒に戦争をしている）という一種の責任感を持っていた。

ただ、出征（しゅつせい）「戦争に出発する」の日に電車の発車ベルで、これが最後だと思った時、ふと目頭（めがしら）が熱くなって涙が浮かんだことを、今でもふっと想い出すことがある。軍隊での仕事は馬の世話である。起床ラッパが鳴り響く、点呼（人数の確認）、朝令、体操が済むと、朝食前の各班ごとの馬と厩（うまや）の清掃。一頭ずつ馬繋場（ばけいじょう）「馬をつないでおく所」に引き出す。寝藁（ねわら）「馬小屋の床に敷いた藁」には馬の糞尿（ふんりょう）がおびただしく付着して、汚らしい気がするが、古年兵の鉄拳（てっけん）「げんこつで殴られること」の怖さに、素手でこれを抱きかかえて外に出すのである。厩（うまや）に敷き詰め踏み固められた糞尿（ふんりょう）が醜（みにく）く、かなり重

くなっている。通路へ出すだけでも並大抵の事ではない。厩（うまや）から通路へ、通路から乾燥場へ運んで、畦（あぜ）を作って並べる。昼食前の手入れの時間には上下置き換えの乾燥を行う（寝藁（ねわら）返し）。入隊の一週間位は寝藁（ねわら）の糞尿（ふんりょう）の悪臭（あくさう）が軍衣（ぐんい）（服）に付着して食事が喉（のど）を通らない有り様であった。空襲警報のサイレンが鳴ると、兵士より遙（はる）かに大切な軍馬の待避作業だ。兵営外の松林に馬と共に駆け込まなければならぬ。あの名古屋大空襲の場面は煙で真っ黒になった空がぱつと明るくなり、その火の手を遠くに見ることができた。名古屋城が焼けたのもその時であった。一瞬にして、こうした立派な建造物が毎日敵弾で焼失して行くと思うと、悔しくて悔しくてたまらなかった。B29の編隊が昼夜の別なく、大空を圧して悠々と飛ぶ。特に昼間は飛行機がよく見えるだけに癪（しゃく）に障（さ）る。その下の方でB29の高さまで届かない日本軍の高射砲の弾丸が、バンバンと白煙となって散る様子は、見るに凌（しの）びない光景であった。一方、P51艦載機（かんさいき）の振舞いはとても煩（うるさ）かった。ものすごく速く低空から逃げる

人々を機銃掃射する。キーンと金属音を立てて掠めて行く。チョットのこと
で運がなかったら、私や馬は生きていなかったであろう。夜の空襲では照明弾
が途中、一列に並び留まって明るくし、一挙に焼夷弾を投下してくる。日米
の戦力の差がこんなにも違うのかと残念でたまらなかった。

終戦の事実が明らかになった日、上官や古年兵の酒宴が、気の緩みとで多
くは狂ったように唄い踊った。敗戦を喜んでいるのではないが、自棄になっ
ているように思えた。要は、なんとなく自由になったのと、残念無念の日本人だ
ったからの宴であろう。

私たち初年兵も、戦争の終結で「これで家に帰れる」と、思うだけでも身も
心も浮き立って「ワイワイ、ガヤガヤ」入隊以来の騒ぎであった。何もかも全
てが嬉しかった。笑ったことのない私たちの笑い顔が可笑しいと言っては、ま
た、笑い転げていたのだった。いま考えると、初年兵時代の私には、最初で最
後の思い出深い楽しかった日でもあったと思える。

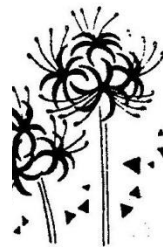
郷里の親元へ戻つての家庭の食事も、軍需工場や軍隊と似たり寄ったりであ
ったが、ちよつとでも美味しくという母心と、生まれ育ったわが家に戻れ、家
族と一緒に暮らせる喜びと惨い戦争からホットした開放感で、感無量の私の
体験であった。

一見、人間と人間の殺し合う残忍さや悲劇の傷跡は、過去のことのようにな
るかも知れない。しかし、広島・長崎の原爆投下の犠牲は消え去っていない
のだ。私たち日本人は、二度と戦争をしてはならないと誓っているのに、依然
として地球では民族と民族、国家と国家の破壊戦略を挑んでいる。至極、残
念なことである。

一方、戦中・戦後食器一杯の代用食（米以外の蔬菜が多い）に空腹に耐え
きれず、食べられる物はなんでもあさっていた姿を未だに忘れたことがない。
あの激しい空腹に悩まされる生活に、見栄も外聞も構ってはいられない時代を、
いやというほど体験された人々は数多いであろう。

現在でも海外では戦争などの食物不足で痩せさらばえた子どもたちがいるニュースを見ると、自分が体験してきただけに、胸が痛くなるほどの悲劇であることを痛感する。

終わりに 日本の安全は「ある国々の脅威」に対抗する軍事力の強化によって保たれると、よもや本気で考える者は日本人にはなからう。いまや、核兵器の発達と軍備強化によって平和が保てる時代でもないのである。世界に先がけて平和憲法をもった日本は、その先頭に立つことによって、人類の平和と安全につくす道を選ぶべきであろう。私たち国民の生命と財産を守るのは軍備ではない。平和運動の原点に立ちかえり、軍備拡張と軍国主義化を阻止するために行動することは、決して無駄ではないことを今も、そして、半世紀前のあの太平洋戦争の悲惨さを、教科書として、歴史が教えてくれているのである。



兵隊と村人

梶野 渡

一、四河子警備隊長を命ぜられる

昭和十六年十月中旬「四河子警備隊長を命ずる」の命令を受けました。四河子警備隊は東葛駅と鳥衣駅の中間にあつて、鉄道警備を主任務とする、兵力六名の分哨（一本隊から別れた見張り所）であります。この警備隊は部隊の中で、指折りの危険な分哨で全滅の前歴もあり、附近で鉄道爆破も度々やられている処で、中隊の鬼門で其処での勤務を敬遠されている警備隊であります。

二、何故状況が悪いのか

南京を攻略した日本の大部隊が、次の徐州作戦に備えて、この辺一帯で戦備を整えていた。その間住民に多大の恐怖と苦難を与えました。占領する日本軍は十五師団管下と六師団管下に別れておつて、現場での横の連絡が極めて希薄（少ない）でありました。中国軍は、その弱点を知つていて、鉄道を横

断して東西に移動する時、警備隊を襲ったり、鉄道を爆破してゆくのです。日本軍は鉄道が爆破される度に民家を焼いたり、壊して来ました。随って附近の部落の住民は、日本軍を恐れ、怨嗟（恨む）の心が強く日本軍の事を東洋鬼子（東の国の鬼）と云って非友好的であります。

三、宣撫工作（住民の非友好的意識の払拭（なくす））

附近に中国軍の横断路があつて、その上周辺の部落の住民から恨まれていては六人の警備隊員で3 kmに及ぶ鉄道守備の任務を完遂（やりとげる）するのは仲々容易ではありません。どうしても附近の住民の非友好的意識を和らげて、笑顔で会話の出来るまで宣撫工作を行うことが必要であると痛感して、周辺部落の情報を集めました。

村に入つて村人と話の切っ掛けをつくるには、村人が望んでいる品物をみやげとして持つて行くのが、手っとり早いと思ひ、検討の結果、日本の薬を持参、治療活動を実施することにしました。中隊の宣伝係に頼み込み、宣撫用の消毒

薬（赤チン、マキクロロム）やクレオソート丸（正露丸）を入手、医務室にも無理をいって、アスピリン、皮膚病用の軟膏、消毒薬（アルコール）脱脂綿等を分けて頂き、私の預金通帳から一年分程たまつていた給料を下ろし（初年兵教育、作戦参加、入院等で殆ど使つていなかった）酒保（兵隊用のコンビニ）にて、石けん、タバコ、マッチ等の日用雑貨を購入、街で子供用みやげの菓子類を揃えて準備いたしました。

四、部落宣撫に出発

用意した薬品、日用雑貨、菓子等の一部を持って、治田一等兵と二人で出発しました。部落の様子を暫く監視しておりましたが、異常が無い様でしたので、治田一等兵が

「オーイッ！」

と向こう岸に声をかけると、一人の若者が家から飛び出して来て舟を漕ぎ出しました。私は油断なく部落の状況を見ておりました。すると舟を漕いでいる

若者が

「梶野シーサン（先生）！」

と呼ぶではありませんか。私は思わぬ呼び掛けにビックリして、若者を見ました。

「オ、陳ではないか。」

「ヤッパリ梶野シーサンだ。梶野シーサンは負傷して日本に帰ったと聞いていましたが、再び会えてうれしい。」

舟を岸につけるや陳は私に抱きついてきました。私は

「陳なつかしいな、傷が治って一週間程前帰ってきて、今度四河子警備隊長になったので、これからこの部落の人々と仲良くしたいので、今日村長さん始め皆さんに挨拶に来たのだ。陳がこの部落におれば幸いだ。村長さんに紹介してくれないか。」

「梶野シーサンの事は良く知っている。梶野シーサンが来てくれたことは、

本当にうれしい。早速村長に紹介するから、一緒に行きましょう」

と云ってくれた。

「陳」とは、中隊が作戦に出動する時は、いつも荷物運搬の為、中国人の人力を二十人、三十人位雇っていました。その中に陳もいて、どう云う縁か、私と一緒に行動が多く、共に弾の下を潜り、飯盒（野外でご飯を炊く器）の飯を分け合った仲で、弟の様に可愛がっていた若者です。

この陳が部落にいたことは、将に天佑（天の神の助け）とも云うべきでしょう。「どうせ拾った命」と腹を決めて、この部落に乗り込んで来たのですが、

陳の出現で、この宣撫工作に希望がみえて来ました。

五、部落に入る

陳に案内されて村長に面会しました。緊張した面持（顔付き）でありましたが、陳が上手に紹介したのか、村長の顔が和らいできました。

「私達は決して村民を苦しめたり、物品や労力を強要するようなことはいた

しません。村人の生活の安定と幸せを心より願っております。私達はこの村の附近に住んでいるので、この村の一人として、村のお役にたちたいと思っております。私がどんな人間か、この陳さんが知っておりますから聞いて下さい。これからの私の行動を見ていて下さい。本日は御挨拶のしるしに、タバコや石けん、子供達の菓子を少しですが、持って来しました。これらは私の給料一年分で買ってきましたが、何分にも給料が安いので、少ししか持ってこれなくて申し訳ないが、村人にタバコ一本づつでもよいからあげて下さい。それから菓を少し用意してきましたから、風邪の人とか、皮膚病の人を呼んで下さい。私は医者ではありませんので、診断は出来ません。薬を塗る位はできます。」

と村長に告げました。村長は喜び早速陳を村へ走らせました。陳が五、六人皮膚病のある人、腹痛の人達五人を連れて来しましたので、夫々薬を塗ったり、飲ませました。村長は子供達に菓子を与えていました。長時間村にいと、中国兵が来て射ち合いになれば、村人に迷惑がかかる懼れもあるので、二、

三日後に又来ることを約束して、一時間程で村を離れました。次に村に来る日を決めることは、中国軍に内通（ないつう）「ないしよで知らせる」されて待ち伏せされる危険性もあるので、日時は不定期に訪問することにしました。

六、宣撫活動軌道にのる

二ヶ月位は、まめに部落に来て、村人達にこちらから

「ニーハオ」（こんにちは）

と声を掛けたり、タバコを

「どうぞ」

と差し出し火をつけてやったりしました。学校へ行けない子供達が十数名おりましたので、折り紙をしたり、笹舟を作って川に浮かべたり、紙飛行機の作り方を教えて飛ばしたり、時には簡単な算数も教えてやりました。

医療活動の方は大繁昌でいつも二十人位は来しました。評判を聞いて遠方から、親戚や知人の家に泊まりこんで私達を待っている人もありました。この

頃になると前に治療した人達が、皮膚病が治った。風邪や腹痛が治った。と云って御礼に卵や鶏とりを持ってくる者がありました。

「御礼はよろこんだ笑顔だけで結構です。」

と何も受け取りませんでした。村長は私達が村に居る間は村の外れに見張りを出して守ってくれる様になりました。

或る日、皮膚病を汚い手で搔かいてバイ菌が入ったのか、膝ひざから下が化膿して赤く爛ただれたヒドイ患者がきました。悪臭がして顔をそむけたくなるような状態でした。イヤとも云えず、地べたに座まって綺麗に消毒し、丁寧に薬を塗ぬってやりました。処ところが繻ほうたいの持ち合わせがありません。この儘まま帰せば不潔な処ところに住んでいるので、又バイ菌が入ってしまいます。思案しあんの末、私の三角巾繻ほうたいで縛しばってやる事にし、三角巾のガーゼをあて三角巾でしっかり縛しばってやりました。この様に真白い包ほうたいで縛しばってもらったことのない患者は勿論、見ていた村の人達もビックリしておりました。治田一等兵が陳ちんに

「今、梶野兵長が使った繻ほうたいは、梶野兵長が負傷した時、自ら応急措置おうきそち（と）りあえずケガの治療をすること」をする為ための大切な繻ほうたいで再び支給を受けるには繻ほうたいを無くした理由を報告しなければなりません。こゝで使用したとは云えないので梶野兵長は叱なられると思います。」

と話しました。

七、村人達は私を友人と認める

その事があって十日位たった日、村長と陳ちんがしみじみと話をしてくれました。

「梶野兵長は吾々われわれを人間らしくつき合あってくれて温かく言葉をかけてくれました。吾々われわれの生活安定についても、色々配慮してくれました。本当にありがたいと思っておりますが、長い年月の間にしみ付いた、反日（日本人を敵として見る）感情はそう簡単には消えません。正直に云って、梶野兵長の善意はわかっていても疑心暗鬼（疑うこと）でありましたが、自分の大切な繻ほうたい

で治療してくれました。梶野兵長の友情と誠意は未だ且つて経験したことのない人間の温かみを感じました。患者の足を温かく包んでくれたあの真白い繻褌は、本人は勿論ですが、村人全部の心を温かく包みました。あの一本の繻褌は、梶野兵長と村人の心を強く結びつけました。梶野兵長達はもう、吾々の友人です。これからよろしくお願い致します。」

と私の手を強く握りました。

村長の話があつてから、村の様子は変わってきました。その最たるものは、村の中央に共同井戸があつて、そこで何時も主婦達数人が、洗濯や洗い物をしておりますが、私達の姿を見ると一斉に家の中にかくれていたのが、今日は私達が側を通つても平気で仕事を続けているのです。

次に来た時、共同井戸の主婦達の処にゆき

「こんにちは、寒いのに大変ですね。今日はお母さん方におみやげを持ってきました。これは香りの良い化粧石けんです。この石けんでは体を洗って旦那様

をよろこばしてあげて下さい。」

と冗談を云いながら一個づつ配りました。最後の人にあげようと顔を見たら、可愛い年頃の娘さんではありませんか。私が一寸ビツクリしていると、一人の主婦が

「兵長、何をビツクリしているの早くあげないか。」

又他の主婦が

「兵長、美しい子でしょう。兵長の目付きが変わった。」

等と云うので、主婦達は面白がつて笑い声が出ました。それで緊張がほぐれたのか、私に次々と質問してきました。

「年はいくつか？」

「妻はあるか？」

「中国へ来て何年か？」

「両親はあるか？」

等々。私が二十二歳とわかったので同情する人もあった。五十代の主婦は母心でも出したのか

「警備隊は男ばかり、食事や洗濯はどうしているのか？」

と尋ねる人もありました。今迄逃げかくれしていた主婦達と冗談が云えるようになった事は大きな前進です。特に美しい年頃の娘さんが姿を見せると云う事は、村長の言葉を裏付けるのに十分な事柄であります。このような田舎で日本兵の前に年頃の娘が姿を見せることは本当に大変なことなのです。

八、主婦達が洗濯に来る

一月の末頃でしたか、警備隊に思いもかけぬ訪問者がありました。「陳」を伴った井戸端会議常連の主婦達数名です。

「今日は皆さん方の洗濯にきました。洗濯物を出して下さい。」

隊員達はビックリ。ソワソワ、私は

「折角だから洗濯をやってもらえ」

と云いました。

主婦達は馴れたもの、一時間程で終わりました。

「御苦勞様。」

と熱いお茶をサービス、主婦達も隊員達のうれしそうな顔に満足して帰って行きました。

治田一等兵は今迄の苦勞が報いられたと喜んでおりました。

隊員達も思ってもみないことに、一寸興奮気味それもその筈、主婦達の中にあの可愛い娘さんも一緒だったからです。それにしても何をやられるかも知れない荒くれ者の日本兵の警備隊に良くも来てくれたもの。まるで飢えた狼の群の中に子羊が訪ねてきたようなもので、何事もなく帰ってもらって私はヤレヤレです。私は警備隊長と言っても、隊員五名のうち二名は年上で古年兵「兵隊生活が長い者」三名は同年兵のモサ「荒くれ男」達、一寸心配でしたが、私の立場を理解していてくれて有り難かった。

九、警備隊襲撃をうける

毎年のことですが、春節（旧正月）が終わると中国軍の蠢動（うごめくこと）が始まりますので、塹壕（敵の弾を防ぐ堀）、銃座（機関銃を置く台）の補強等、警備を厳重にしていました。二月中旬、夜の十時頃警備隊のトタン屋根に銃弾が派手に打ち込まれました。訓練通り全員配備について、応戦態勢を整え、敵兵の近づくのを待ちました。敵は西南方向から打ってきますが、兵力はそう多数ではなさそうです。十分に引きつけてから、軽機関銃と擲弾筒（手りゅう弾を発射する筒）で対抗しました。敵はやゝ後方に退いて散発的に銃を打って来ます。唯（ただ）こちらは六名だけです。周囲に廻（まわ）られると兵力が分散して死角が出来るので、その事に神経を集中しておりました。時間はどれだけたっていたのでしょうか。東の方で突然喚声（かんせい）が上がり、銃声がありました。友軍（味方）の応援であれば鉄道伝いに北方から来る筈（はず）だし、又友軍は夜は喚声（かんせい）をあげないのです。何者だろう、敵か、味方か判断しかねていると、敵

は日本軍の応援と思ったのか、一斉に引きあげて行きました。ヤレヤレと思っていると、東の鉄条網（有刺鉄線）の処（ところ）から私を呼ぶ声がします。どうも部落（ちゅうらく）の陳（ちん）の声らしい。懷中（かいちゅう）電灯を持って警戒しながら近づくとはやはり陳（ちん）や村長達十数人でした。

「梶野兵長無事か？」

と云いますので

「この通り異常ない。」

「隊員はどうか？」

「皆んな大丈夫だ。」

「警備隊が襲撃されている梶野兵長を助けようと村人と駆けつけました。皆さんが元気で安心致しました。では、気を付けて下さい。」
と帰って行きました。

隊員は思わぬ応援に感謝感激、部落の人達の友情に涙が出る程うれしく隊員

達も五ヶ月の宣撫工作の成果に驚いておりました。

十、鉄道連続爆破される

それから十日位たった夜十一時頃今夜は一寸早めに鉄道巡察（毎晩二名で一組二回往復5km位を線路を見回り）に出発しようと表に出た途端、南の方で30m×40mの大火柱が上がり、物凄い爆風と共に轟音が闇を劈きました。私は

「鉄道がヤラレタ、中隊本部に電話、警備隊長他一名現場に急行、治田行くぞ！」

と叫びながら、走り出しました。走れど走れど爆破現場にぶつかりません。とうとう省境界線迄来てしまいました。闇を透してみると40m×50m先で枕木やレールが散乱しているのが見えました。治田一等兵と

「寿命（一命）が三年縮まったなー」

と胸をなぜおろし、附近の敵兵潜伏（隠れていること）の有無を確かめな

がら帰途につきました。それから又一週間位あとの夜、東の部落の方で盛んに犬の鳴き声が聞こえるので、表で注意していると、又30m×40mの火柱が南方で上がりました。前の時より近く感じました。轟音と共に爆風が物凄く屋根が飛びそうでした。

「今度はやられたぞ！」

と思わず叫び又走り出しました。走れど走れど現場はなく今度も又境界点迄来て、闇を透かすと前回と殆ど同じ地点がヤラレテいました。

今までの爆破地点の殆どは、分哨から1・5km南の横断路の附近でしたのに敵さん何故道のない処で二回も爆破するのかなー。私達は助かったのによいが調査をしておく必要はあると思いました。

翌日部落に行つて村長に

「二回連続で鉄道を爆破されました。私の管内でなかったので助かりましたが、一寸油断のならない状況となりました。唯、今迄に爆破されたことな

い地点で二回も行われているので一寸気になります。村長さん何か情報があれば教えてほしい」

と云いました。村長の顔が何時もと違って青ザメ緊張している様でした。

村長は何か知っている様子。口ごもって辛そうでした。

やがて決心した様に話し出しました。

「実は梶野兵長に申しにくいのですが、二回とも爆破のあった夜、東の村の村長が、共産兵が来て呼んでいるから来てくれと云ってきたので、三人で出かけました。共産兵は『今夜鉄道を爆破する、日本軍の動向、安全な爆破地点、時間等について色々聞かせよ』と云いました。(内心これは大変なことになった。私達の力では爆破をやめさせることは出来ない、この儘では梶野兵長の処が危ない。何とかせねばと立案、そうだ、阻止させることが出来なければいつそのこと私達が爆破地点を案内して梶野兵長の危急を救おうと咄嗟に思いつき決心して) 共産兵に『私達は日本軍の動向、この附近の地形にも詳しいから安

全な地に案内します。』と申し出た。土地不案内の共産軍はよろこんでOKしたので、兵長の管理外のあの地点につれていって爆破をさせたのであります。梶野兵長の管内ではないが、兵長は日頃『新中国を建設するには鉄道は大切である、その為我々は夜も寝ずに警備しているのだ』と云われておりました。その大切な鉄道の爆破に手を貸したことは誠に申し訳なく、友人の梶野兵長に合わせる顔がない。」

と謝りました。私は

「正直に話してくれてありがとう。自国の軍隊の云い付けに背く一従わない」ことの出来ない村長の立場は良くわかります。この様な緊急の時にも私達の事を思い、私達の危急を救ってくれた事は、本当に感謝に堪えません。村長さんの友情は決して忘れません。今迄と同じように仲良くやりましょう。」と云いました。村長達は安心して、私の手をしっかりと握ってくれました。

十一、人生觀の転機（変わり目）

この事があつて、私は言葉が違つても民族が異なつても、人間同士であれば、心は通じるものだと言ふことを確信いたしました。

部落の人達は学問はありません。資産も地位もない、貧しい農民でありましたが、信義と友情を大切に作る豊かな心を持つておりました。

当時私はこの一ヶ月のうちに警備隊の襲撃管内ではないが、鼻先で鉄道を二度ヤラレル中で、隊員の命、3 kmの鉄道を守つて列車を安全に走らせねばならぬ警備隊長として、極めて厳しい状況の中に在りました。この様な時の村人達のこのような行動には深い深い感銘をうけました。

五ヶ月の短い期間ですので余り大した事は出来ませんでした。が、部落の人達の幸せを願つたひたむきな私の心をわかつてくれたのが、身の危険を顧みず、私達の危急を三度も救つてくれた信義を重んずる律儀な（まじめな）部落の人達の姿に、私は人間の美しさ、素直な人間の生き方、人間の在り方を見た思

いが致しました。『目から鱗が落ちた』（物事の眞実を見つけること）と思ひ、この事が私の人生の転機となりました。時に私は二十三歳でした。

私はこれ以後『信義（信頼と正義）を大切にして、何人（どのような人）でも相手の人格を尊重し、誠意を以つて対応する』を人生の信条（固く信じる事柄）として行くことを決心しました。

それ以来六十年、常にこのことを念頭に暮らして来ました。

而し人間は弱い者、信条にはずれるようなことも度々ありましたが、この時の感動を思いおこして軌道修正（正しい方へ直すこと）を行い、あの名もない部落の人達に恥じないようにと心掛けてまいりました。

《ごめんなさいお母さん》 作曲 坂手 尚子



1 げん ば く が お ち て
2 あ か い — お ほ の と お
3 か あ さん の ご と ば

ちや い ろ の あ う し の な か
わ が や が な も え る も え と ば

か か あ さん は い つ た
わ あ た し は い き ぶ る

は や く に げ よ と
つ や く に げ よ と
せ か い の と も と

三

母さんの言葉
忘れないあの言葉
私は生きる
世界の友と
科学の力を
平和のために
語り継ごうよ
生き続けよう

二

赤い炎
我が家が燃える燃える
母さんが叫ぶ
強く生きよと
親子を引き裂く
悲しい戦争
語り継ごうよ
生き続けよう



おお や こ を ひ き さ く
おか や が こ を の ひ ち か さ く

い っ しゅ ん の く も
へ ない しわ い の せん そ う

1~3同じ か た り つ こ う よ
1~3同じ い き つ づ け よ う

ごめんなさい

お母さん

子どもたちと

歌いたいうた・歌詞

一
原爆が落ちて
茶色の嵐の中
母さんは言った
早く逃げよと
親子を引き裂
一瞬の雲
語り継ごうよ
生き続けよう



◇編集後記◇

◆前号から衣替えした「戦時体験記録集」第八集の発刊にあたり、多くの応募をいただきまして、ありがとうございました。

◆人にはその人の数だけ歴史があり、決して他から侵されることのない財産であると思います。戦時体験をテーマで書くことには

「語り継いでおきたいので」

「背中をボンと押されてまとめてみた」

「自分史の一部として記憶に留めるため」

等の理由で原稿を提出していただきました。

◆平和を願うメッセージが伝わってきます。文章の一文でも共感、共鳴できるところを見出していただければ幸いです。

◆今年の憲法記念日には護憲、改憲を掲げての集会が全国各地で開催されました。

日本国憲法の前文の結びに『日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目標を達成することを誓う』とあります。

この機会にひとり一人が再度熟読、確認し世界の恒久平和への道へ邁進まいしんいたしましょう。

編集者一同



戦時体験記録集（第八集）

編集・印刷・発行・・・・・・・・戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日・・・・・・・・二〇〇一年七月十四日

発行部数・・・・・・・・百五十部